

SORA

web magazine 2018.nov. vol.102

Palau

Travel

MAP
CLICK!

ウーロンエリアにも拠点を持つようになった今のパラオスポーツ号！

以前は、ジャーマンインナーエリアに停泊して、常にブルーコーナーやブルーホール、ジャーマンチャンネルなど、パラオに来れば何度でも潜りたいポイントの近くでスタンバイしていたパラオスポーツ号だが、最近はその有名ポイントの前進基地としての役割をウーロンエリアにも求めるスタイルになった。現在、パラオスポーツ号が得意とするのが、誰もいない早朝のブルーコーナー。そして遭遇率がぐんとアップするジャーマンチャンネルでのマンタとの出会いと、ウーロンエリアで方を持って数えるカムムリブダイが集まり大産卵を行う生態行動を、ゲストにより楽しんで欲しいと熱望している。

Photo & Text : Yasuaki Kagii



tsumi-shima tsumishima.com
ダイバーの夢をつみあげていく島



(株)ワールドツアープランナーズ
www.wtp.co.jp

© 2018
World Tour Planners Co.,Ltd.
All Rights Reserved.

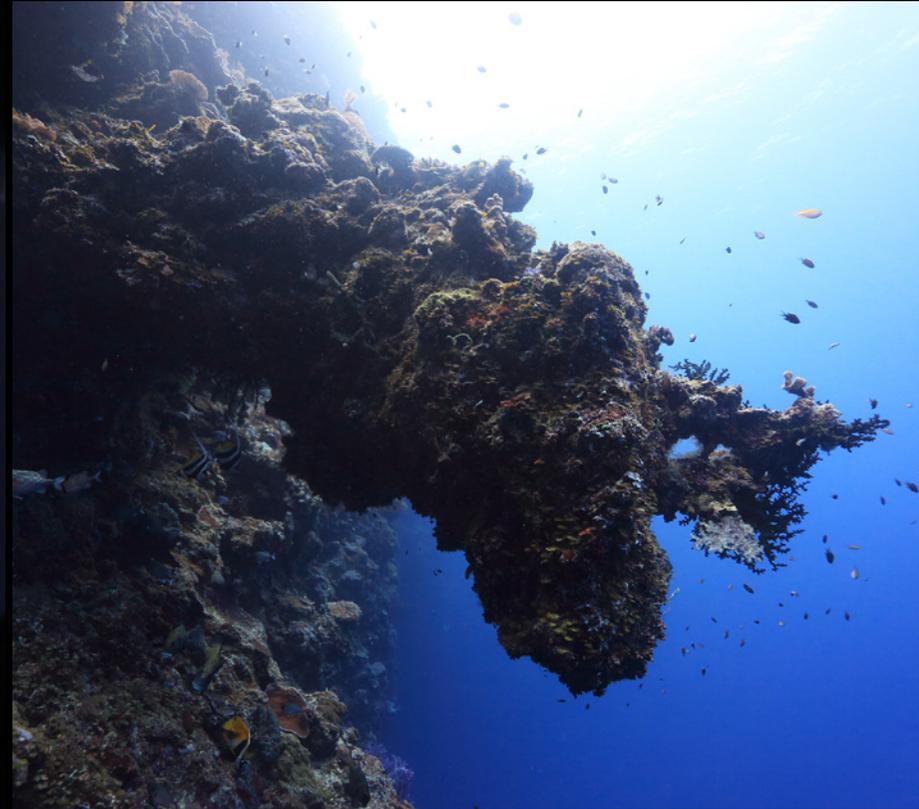


早朝ブルーコーナーに魅力

パラオスポーツ号の魅力はなんといっても、そのダイビングスタイル。まずは、人気のブルーコーナーに、誰よりも早くエントリーできるということ。世界的にも有名かつ、ギンガメアジやバラクーダの群れ、メジロザメやナポレオンに至近距離で出会えるブルーコーナーは、ダイバー垂涎のポイント。日中になるとコロールからの各ダイビングサービスで、ポイントは大賑わい。たくさんダイバーがエントリーしたからと言って、ポイントの魅力は変わらないが、それでも、朝生まれたてのブルーコーナーにエントリーできるのは、やはり気持ちが良い。先端付近で待つダイバーもいないので、自由に青い海の中を泳ぐことができる。それが最高に気持ち良い。混み合う前のブルーコーナーにエントリーしたので、心にも少し余裕を持って、ブルーホールなど他の有名ポイントを巡ることができる。

Travel
Palau
パラオ・パラオスポーツ号





いつまでも変わらぬブルーホールの光

曇り空だったが、それはそれで差し込む光に強さはないかも知れないが、少し優しい光が差し込むのではないかと、ブルーホールに向かった。エントリーしてまず紹介してもらったのが、外洋に面したリーフに突き出た岩で、その形が龍の首に似ていること。確かにシルエットと微かな凸凹が、見ればみるほど龍に似てくる。最初はあっさり撮影して終わるつもりだったが、この角度の方がより良いのではないかと試しているうちに、どんどんと時間が……これではホール内の撮影ができなくなると……気持ちを入れ替えて、いざホールへ。リーフの上に大きく開いた口から侵入。遠く先に見える光を感じながら降りていくと、なんとナポレオンフィッシュが出現。あとで聞くと、このホールに3年ほど前から住みついているとのこと。そんなことを知らない私は、千載一遇のチャンスだと思い、ナポレオンが逃げないように、うまく距離を詰めては撮影。これまでにないシチュエーションで撮影でき、もうご満悦。そして、ホールの中に降り立つ。いくつも大きな穴から見える光を楽しみ、色んな想像力を掻き立てられて撮影。カメラで捉えた外洋側のホールだけが、どこまでも青い……。そんな不思議を覚えた1ダイブとなった。

30mに住む人気種!

ニュードロップオフにエントリーして、リーフを左手に見ながら、潮当たりの良いコーナーの先端に向かう。ツムブリやユメウメイロなどが群れ、賑やかな様子。大きなアオウミガメに誘われて、少し沖に向かうと、別のカメも向こうからやってきた。コーナーを超え、急斜面の細い砂地を降りていく。すると30mほどの海底に、人気種のシコンハタタテハゼやアケボノハゼを見つけることができる。シコンハタタテハゼは4匹ほど確認、アケボノハゼは幼魚が生まれたせいか、その水深ではかなりの数を見つけることができた。そして変わらずリーフを左に進んでいくと、大きなウミウチワに住むクダゴンベを見せてもらった。周囲を見渡すと、私の大好物のカラフルなソフトコーラルやヤギが群生する。時間が許すなら、ここでカラフルなワイドの水中景観をじっくり撮影したいと思う。そして進んでいくとミヤコテングハギの群れに出会う。その周囲にはメジロザメがウロウロしていて、その2種類のお魚のコントラストが実に面白い。繁殖のために集まり、時折リーフの上で海藻などいっぱいミヤコテングと、それを食べようと機会を伺うメジロザメ。海の中は、お魚たちの思惑でいっぱいになっていた。





潮が上げている時の夕方は ジャーマンチャンネル

潮が上げている時の夕方のジャーマンチャンネルは、チャンネルの外側の浅場にタカサゴ、ギンガメアジ、マダラタルミなどの群れが大集結する。そこは海底からの潮が巻き、プランクトンが集まっているので、お魚たちにとっては絶好の捕食場となる。その時に現れるマンタも捕食に夢中で、彼らとの接近を許してくれる。その大祭典は毎回ではないが、上げ潮の夕刻はマンタに高確率で出会うことができる。(写真のマンタは今回、グラスランドで撮影したマンタ)



以前は、ウーロン方面は 潜らなかったが……

パラオスポーツ号を移動させて、ウーロンエリアにも停泊するようになった。これまで潜り慣れたジャーマンエリアだけでなく、ウーロンチャネルやシアスコナー&トンネルにも、俄然アクセスしやすくなった。その中で、一番素敵だと思うことは、毎月の新月周期の時に観察できる早朝のカムリブダイの大産卵。ポイントであるグラスランドからスピードボートで約10分のところにパラオスポーツ号は停泊しているので、朝も楽チンでアクセスできる。

Travel
Palau
パラオ・パラオスポーツ号

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく



早朝ダイブでカンムリブダイの大産卵を狙う！

Travel
Palau
パラオ・パラオスポーツ号

その日毎に違うが、潮の具合を考慮して、初日の出発時間は5時45分だった。まだ薄暗い中、ブリーフィングを聞き、ボートに乗り込んだ。クルーズの係留地からポイントまで約10分の移動。そして、ボートから飛び込んだ。水深5mの海底には、豊かなサンゴ礁が広がる。決して明るくはないが、水中ライトが必要な感じでもない。ガイドの後ろに付き、砂地の方へ泳いでいく。途中、何匹もカンムリブダイが目の前を往来する。砂地の上に、数え切れないほどのカンムリブダイが大行進を始める。眺めているとメス同士が絡み合いながら、上に向かい、白いものを海中に広げては大産卵を行う。まるで無秩序に放たれる花火のように、どこで上がるかわからない。距離を置いて見るのは簡単だが、接近しての撮影が至難の技。それでも、早朝に目の前で繰り広げられる生命の神秘に酔いしれずにはいられない。結局私は3日間、早朝にカンムリブダイの産卵を狙った。3日目の出発は6時半だった（その時の潮によって異なる）。そのくらいの出発になるともう随分と周囲も明るく、早朝ダイビングのイメージはない。エントリーして、小さなクリーニングステーションにやって来たマンタにご挨拶を終え、その後、カンムリブダイの大産卵の中に向かって行った。





白い砂地に住むお魚たち

グラスランドは、早朝のカムリブダイのダイビングだけが魅力ではない。エントリーして砂地に進むと、マンタがやってくる可能性がある小さな根がある。それを横目に見ながら泳いでいくと、砂地に大きな物体が。近づいて見るとインドオキアジの群れが集まっている。側で眺めていると、形を変えて、今度は砂地の上を行進する。世界中に砂地のポイントはたくさんあるけれど、こんな風にお魚が群れるところは多くない。隣のこれまた小さな根は、スカシテンジクダイが群れ、ハダカハオコゼが数匹住んでいる。また少し沖合を眺めると、白いガーデンイルの仲間が砂地からニューキノキと顔を出している。その様子が芝生に似ていたために、グラスランドと名付けられた。少し砂地を散歩しているとホソカマスの群れとメジロザメのコラボレーションに出会えた。気持ち良い景色が眼前に広がっている。最後は、浅瀬を行くと、朝、放卵していたカムリブダイたちが、まだたむろっていた。



シアスコーナーとウーロンチャンネル

ウーロン島周辺での代表的なポイント、シアスコーナーは、豪快かつ少し複雑なドロップ沿いを進んで行く。壁沿いにはカスミチョウチョウウオが無数に群れる。コーナーに近づくにつれ、大物が現れる匂いがプンプン。まずはメジロザメが登場。そしてマダラトビエイの幼魚やカメなど。メジロザメに関しては、多い時は20匹ほど群れているという。浅瀬のサンゴも美しいので、潮流が強くない時は全体を眺めたい。ウーロンチャンネルも人気のポイントで、潮の上げ下げでコース取りが変更する。水路の入り口では、メジロザメやギンガメアジ、バラクーダの群れが見られる。チャンネル(水路)の中に入っていくと、キンメモドキが群れ、大きなキャベツコーラルの群生に出会える。



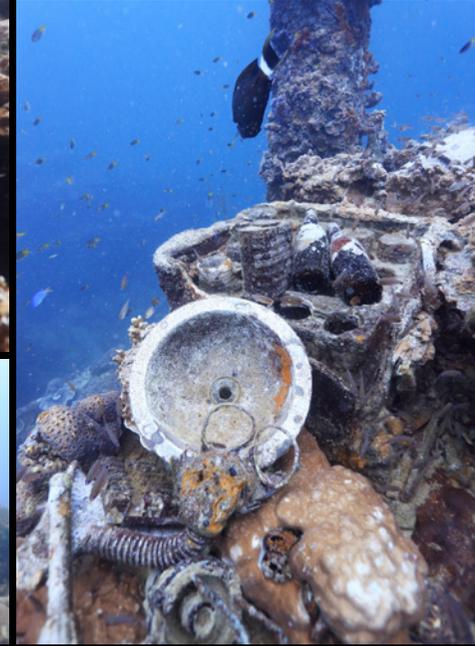
ulong channel



Travel
Palau
バラオ・バラオスポート号

Siaes Corner





マラカルエリア(コロール島周辺)でも潜るパラオスポーツ号

月に2回ほど、パラオスポーツ号が給油でマラカルエリアに戻る時、または、ゲストからリクエストがあった時には、マラカルエリアでも潜ることができる。今回は、知名度も注目度も満足度も高い2つのダイビングポイントに潜ってきた。この2つのポイントの特徴は、コロール島にとっても近いところに位置しているということ。ネームバリューだけで行くと、どこか遠くまで行かないと潜れないのかなとも思ってしまうが、2つのポイントとも大きな湾の近くに位置している。まず、最近パラオでも注目されつつある沈船ダイブ。第二次世界大戦の激戦地であったパラオには、未だ多くの沈船が海底に眠る。今回はその中でも、もっとも露出度が高い全長63mの沈船ヘルメットレックに潜り、撮影してきた。湾内だが透明度も高く、沈船全体が見渡せる。沈船付近には、カメやロクセンヤッコも

見られ、今では平和な雰囲気が漂う。深度もそれほど深くなく、光が届く普通のファンダイブの感覚で潜ることができる。船首から船尾まで形状はしっかり残り、船の上では大量の燃料タンクやビン、ヘルメットやガスマスクなどの遺品を見ることができる。ガスマスクは、以前はその原型を留めていたが、現在はマスクの骨組みの部分だけを見ることができる。ブルーコーナーなどのパラオの魚群に溢れたダイビングとはまた異なるが、歴史を感じる上で、是非潜って欲しいポイントだ。また、周囲には豊かなソフトコーラルに覆われた全長33mのブイ6レックなども鎮座している。



世界でも珍しい海底鍾乳洞 シャンデリアケーブ

Travel
Palau
パラオ・パラオスポーツ号

もうひとつ忘れてはいけないポイントがある。それは世界遺産にも登録されているシャンデリアケーブ。よくぞこのような場所で見つけたなと感心するほど、何の変哲もない湾内にある。壁にポカリと空いた穴から侵入していくと中は真っ黒なので、水中ライトは必携。ライトをつけて浅瀬を泳いでいくと、それは見事な水中鍾乳洞に出会える。白乳色の大きな自然の造形物は、美しくもあり、それが何本か並ぶとまるで神殿のような趣もある。「以前は、小さな水中ライトしかなく、あまり全体像を見ることなく、ライトの明かりだけを頼りにシャンデリアケーブを探索していました。奥に行くと入口の光も見えなくなり、自分がどこにいるのかわからなくなるスリルもありましたよ」とガイドの西本さんも話してくれた。今回は、少し大きめのライトを持ち込み、撮影を試みた。ケーブ内でロストするという冒険的な要素はなかったが、それでも、シャンデリアケーブの全体を見ることができて、水中機材の発展とともに、視点、景色も変わってくるなと実感。また改めてシャンデリアケーブに潜り、新しい絵作りをしたいなとも思った。奥に向かって、途中に4箇所、海面から顔を出せるエアドームがあり、そこで休憩するのも楽しい。



Travel Palau

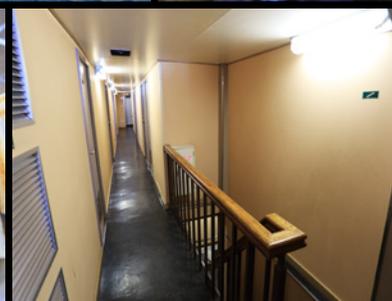
パラオ・パラオスポーツ号



パラオがダイバーにとって唯一無二の憧れの地だった時に、大人気だったパラオスポーツ号。世界中の海で、ダイブクルーズ船があることが主流となった現在だが、当時先端を走っていたのが、パラオスポーツ号だった。それから、憧れのパラオにはたくさんの情熱を持ったサービスやガイド陣が集結し、リゾートからでも様々なスタイルでダイビングを楽しめるようになった。そのように、変化していくパラオのダイビングシーンの中で、パラオスポーツ号も変貌を遂げようとしている。

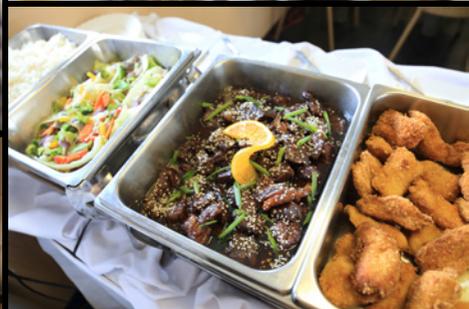
【以前と変わらない魅力】

- 毎日乗船可能で、ゲストは最短2日からクルーズにエントリーできる。
- 早朝ダイビングから日中3ダイブの合計4ダイブを楽しむことができる。
- そのダイビングの合間は、クルーズ船に戻り、快適なリビングやお部屋で寛ぐことができる。
- 週に1度くらいの割合で、お天気の良い時にサンデッキディナーを開催。
- 主流は日本人ゲストで、一人で参加される方も仲間が出来る。
- フィリピン人クルーの4名は、スポーツ号に15年も勤務している人もいるので、顔馴染みのゲストも多い。
- 使い勝手の良い、広いダイブデッキ。
- 日本人スタッフが乗船している。
- ナイトロックス完備。





Travel
Palau
パラオ・パラオスポーツ号



【新しい魅力】

- ジャーマンチャンネルからウーロン拠点を設けた。
- 体験ダイビングを始めた。
- 食事が美味しくなった。イタリアンが得意なシェフが作る洋食・無国籍料理。
- 船が心配な方が、リゾートからダイビングのみをエントリーしてくる。

パラオスポーツ号

9名部屋が9室、4名部屋が3室と客室のサイズなどは変わらないけど、パラオスポーツ号は、我が家に帰ってくる、というイメージを大切にしている。トゥバタハリーフ(3月から6月)やマラバスクア(7月から8月初旬)にも運行している。常に日本人ガイドは乗船し、その現地に詳しいローカルガイドが、その都度乗船する。